テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー～吸血鬼物語～

サニーレタス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー～吸血鬼物語～

【Ｎコード】
Ｎ６３８８Ｙ

【作者名】
サニーレタス

【あらすじ】
吸血鬼・・・
ここ、ルミナシアではそんな存在は空想、または御伽噺と思われていた
そして誕生した・・・
イレギュラーな少年の物語・・・
※作者初投稿です・・・よろしくお願いします

第1話（前書き）

作者初投稿です＾＾

できるだけ良い作品にしていきたいと思いますので感想、アドバイスを良ければしてやってください・・・

第1話

ウリズン帝国・・・

そこで、ある物語が始まった・・・

ＮＯＳＩＤＥ・・・

彼・・・

顔は中性的、そして長い黒髪を後ろで束ねており・・・少し暗さを帯びた青い瞳を持つ彼・・・。

名前はイザック・フーバー

生まれてすぐ親に捨てられてウリズン帝国の城下町の孤児院で育った

フーバーは孤児院の先生がくれた名字だ

そして彼は学校に通いながら仕事をし、いままで孤児院で暮らし

ていた
だが・・・

イザックＳＩＤＥ・・・

「失礼します」

俺はある部屋に来ていた
先程仕事が終わり、孤児院に帰ってきたので部屋に行く途中
みんなから先生と呼ばれているリン先生が深刻な顔をして

『後で私の部屋に来な・・・』
と言われたからだ

そして先生の部屋に入るとそこには見知らぬ二人の騎士団の男が立っており
先生の顔は苦虫を噛み潰したような悔しそうな表情をしていた
そして先生が・・・

「・・・イザック・・・今日からあなたは王立研究所の博士に引き取られることになりました・・・」

そう言われた・・・
一瞬、体が固まった

「・・・何故ですか？」

俺は先生に尋ねた

孤児院は俺の家だ、今更誰かに引き取られるなんてゴメンしたいし

何よりこの孤児院を出て行きたくない

何より「引き取られることになりました」と先生は言ったが

・・・何故決定事項なのだ？

俺の意見も聞かず、強制的に連れて行こうとしている

しかも王立研究所は悪い噂が多い

最近では人を実験体にし、鬼畜な実験を行っているとか・・・

少なくともそんな噂が立っているところに望んでなんて絶対行きたくない

俺がそう考えているうちに騎士の一人が先生の代わりに答えた

「皇帝陛下直々の命令だ。研究所まで連れて行く・・・逃げれば・・・わかるな？」

こうして脅迫をしてくる時点でおかしかった

しかし・・・孤児院に・・・何より、恩人である先生に迷惑を掛けたくなかった

俺は要求を呑むしかなかった・・・

ＮＯＳＩＤＥ・・・

「陛下・・・例の実験の代わりを用意できました」
金髪で目に縦の切り傷がある男が言葉を発する
陛下と呼ばれた人
豪奢な衣に体を包み、黒い髪の上には豪華な王冠をかぶっている
ウリズン帝国皇帝のガンドである

「うむ・・・早速行くぞ」
「はい、今度こそ成功させます」
「当たり前だ！！」

実験の話をしている男性を怒鳴りつける

「私をいつまで待たせるつもりなのだ！！もう十二回目だぞ！！！」
「はい、承知しております」
「・・・で？今回の”実験体”はどんな奴なのだ？」

怒鳴っても仕方が無いと思ったのか、王はまた実験の話に戻る

「・・・イザック・フーバー。１７歳、１８０ｃｍ　６６ｋｇ、生まれてすぐに
親に捨てられ、孤児院で育っています。孤児院の者には一応話を通しました
渋られましたが脅して口止めもしてあります。それに陛下と同じような体格ですので実験体には最適か　と・・・」
「ふん・・・なら早く始めろ・・・”人体吸血鬼化実験”をな・・・」

にやりと歪めた口元にはとてつもない欲望が見えていた・・・

イザックＳＩＤＥ・・・

あれから、お城の研究所に連れて来られた
俺は兵士が言うがままに動いていた

そして俺の目の前に二人の男が現れた・・・

ＮＯＳＩＤＥ・・・

「・・・・・」

「この餓鬼か？」

「はい、この少年がイザック・フーバーです」

ガンドがイザックを指差し金髪の男に問いかける

「ふん、悪いが・・・少し眠ってもらうぞ」

そうガンドが言い放った直後

「・・・！？」

「・・・ハッ！」

皇帝の横に立つ金髪の男が突如こちらに突進してきた

掛け声と共に突き出された拳をイザックは何とか受け流すが・・・

「ハァ！」

「がはっ！？」

次の蹴りは先程の拳とは段違いに速く・・・重かった

腹にもろに蹴りをくらったイザックは為す術無く倒れる

「（こ、こいつ・・・）」

・・・孤児院でも、町でもどんな奴にも負けたことは無いイザックは

その事実を信じられないでいた

学校の剣術、格闘術の授業では常に一番、大人にも負けたことが無いイザックだったがこの男は
油断していたとはいえイザックを一撃で立てなくしてしまったのだ

「ふむ・・・まだ意識があるか・・・」
「が・・・お前・・・なにもん・・・」

ここまで言い、イザックは気絶した

「・・・運べ」

そして気絶したのを確認するとガンドは研究室内に運ぶように命じた

第1話（後書き）

難しいです・・・

ぜひともご意見待ってます！！

第2話（前書き）

2話目です・・・
難しい・・・ほんとに・・・

第2話

イザックＳＩＤＥ・・・

「・・・・・・ここ、は？」

真っ暗で何も見えない・・・

恐らくどこかの大きな部屋だろうか・・・

「・・・・・・っ・・・・」

動こうとしたが手と足を拘束されていた

強い力で縛ってあり、解けそうに無かった・・・

そこに・・・

「・・・！？」

急に電気がつき、まぶしさに目を細める

周りを見ると古い感じで周りの壁には石が詰められていた

「ここは？」

「目が覚めたようだな」

「・・・！？」

上のほうから声が聞こえた

見るとそこには踊り場があり二人の人・・・ガンドと金髪の男が

立っていた

「・・・・・・何をするつもりだ」
「ふん・・・愚民め、口を慎め」
「・・・いきなり連れて来られて、こんな扱いをされて・・・事情くらい知る権利は俺にはあるんじ　ゃないか？」

苛立ちを抑えながら状況を問う
そして返ってきた言葉は・・・最悪のものだった

「・・・お前には、ウリズン帝国繁栄のための・・・そして・・・私の永遠の命の
ための実験体になってもらう・・・人体実験のな」

にやりとゆがめた口元を見て、背筋に悪寒が走った

「（逃げるしか・・・）」

必死に拘束から逃れようと腕を動かす
しかしやはり解けそうな気配は無い

「・・・おい、始めろ」
「はい・・・」

そして・・・最悪の実験が始まった

「おらぁ！」
「っ！？」

いきなり頭をつかまれ床に叩きつけられた
額からは血が流れてきた

「きひひひ・・・初めまして、イザック君」
「・・・誰だ？」

気持ちの悪い声で俺の名前を呼んだ男は床についている俺の顔を強引に上げると
気持ちの悪い笑みを浮かべた

「私の名前はエリック、今からこの、私が長年研究し続けてやっと完成した
『アムリタ』を投薬しますね？きひひひひひ・・・」

エリックは君の悪い笑いと共に・・・真っ赤な液体、『アムリタ』を注射器に
入れる・・・

「ちなみに・・・今残念ながら、１１人失敗しています。あなたは成功してくださいね？きひひひひ」

今・・・なんて言った？
１１人失敗？
マジかよ・・・成功するのかほんとに？

「みんな『アムリタ』の拒否反応に耐えられなくて死んでしまうんですよ・・・薬が全くもったいないですよ、きひひ」

もう俺の中には恐怖しかなかった
そして・・・こう思った
死にたくない・・・」と・・・

「じゃあ・・・いくよ！！」

そして・・・俺の腕に注射器が突き刺さり・・・
真っ赤なその液体が俺の体内に流れ込んできた

「う・・・・うあああ

突如・・・激痛が俺を襲った・・・
体は焼けるように熱く、視界が真っ赤に染まった
吐き気がし、たまらずに吐血をする
頭が割れるように痛く、どれだけ叫んでも痛みは治まらない・・・
永遠に続くかと思われた痛みだった・・・
しかし・・・・急にそれがふっと和らいだ

「あ・・・あああぁ・・・・」

叫びすぎて喉が潰れたのだろう声が全くでない

そしてエリックは感極まったように

「成功だよぉぉ！！！」

と、不快な笑みを浮かべて喜びの声を上げた

それを見た・・・俺は・・・

急に・・・アイツヲ・・・・コロシタク・・・ナッタ・・・

金髪の男ＳＩＤＥ・・・

「おお・・・せ、成功したのか！？」

「・・・そのようですね」

隣で驚愕に顔を染めるガンド陛下・・・いや、クズ

「よし、エリック！その薬をわしに！！！」

「きひひ、もちろんですよ皇帝陛『ザシュ』か・・・？」

クズが薬を求めエリック博士を呼んだ瞬間・・・

エリックは言葉を止めた

いや、止められた

何故なら少年の手刀がエリックの胸を突き刺していたから・・・

すげえな・・・流石に大人一人手刀で突き殺すのは俺でも無理だ

「なっ・・・！？」

「（はは・・・面白くなってきた）」

ぺろ、と唇をなめる

さぁ・・・久々の戦闘を楽しみましょうか・・・♪

第2話（後書き）

見てくれた方には感謝を！
誤字脱字などがありましたら教えていただけると幸いです（汗）

第3話（前書き）

初戦闘・・・どうか批判だけは勘弁を＞＜

第3話

ＮＯＳＩＤＥ・・・

「がぁ・・・ひぃ・・・・！」

悲鳴も上げれずエリックは目から光を失い、倒れた
そして持っていた『アムリタ』も落ち、容器が割れて地面に染み込んでいった

「あああ！！『アムリタ』が！！！・・・おのれ・・・小僧！！！！！！」

イザックは腕に流れてきた血をぺろりと一舐めした
・・・彼らからは見えなかったのだろう・・・イザックの口元が緩むのを・・・
ガンドは目を見開き絶望した後、怒り狂って

「殺せ！！八つ裂きにしろ！！！！」

そう近衛兵に命令した
それと同時に十数人もの近衛兵が部屋に入ってきて、最初から居た兵士合わせると
二十人程となった

そして・・・
「おらぁ！！」
「ハッ！！」

二人の兵士がイザックを殺そうと飛び出した
一人は突き、一人は上段から剣を振り下ろした・・・が
その二つの剣はイザックに斬り裂くことはなかった・・・

パキン、という音と共に剣を振り下ろした兵士の剣がイザックの手に掴まれ・・・
粉々に壊れた・・・
そして突きを繰り出した兵士の剣は地面に落ちていた・・・
腕ごと・・・

「なっ！？」
「ぐあぁぁぁ・『バキィ』ぐぇ・・・！」

剣が壊されたことにより驚愕する兵士、その間にもう一人の兵士は痛みに絶叫した　直後・・・イザックに顔面を殴られ・・・首が無くなった・・・
否、上から殴ったため首の骨が胴体に陥没してしまったのだ・・・
どちらにせよその一撃で絶命し、その男の剣がイザックに渡った
そして

「・・・瞬迅剣」

イザックの繰り出した一撃はもう一人の兵士の胸を貫くには充分な一撃だった
悲鳴を上げる前にその男も地に伏せた・・・

そして・・・イザックによる近衛兵たちの惨殺劇が始まったのだった・・・

金髪の男ＳＩＤＥ・・・

「な・・・わ、我が国の近衛兵が・・・」

惨殺劇が始まって十分・・・

少年・・・イザック・フーバーの周りには死体、そして、致命的な傷を負ったものしか残っていなかった・・・

「お、お前だけが頼りだ。行け！！」
「・・・拒否します」
「は・・・？」

クズは俺に命令してきたが・・・もう聞いてやる必要も無い

「・・・コロス・・・」
「ひっ！？」

いつの間にかこちらの踊り場に上がってきた少年
それを見てクズは小さな悲鳴を上げる

「コロス・・・」
「た、助けてくれぇ！！」
「コロス・・・・・・」
「なんでもする、なんでもしてやる。か、金か？」
「コロス・・・・・・・・・」
「金でも何でもくれてやるから・・・頼む！！殺さないでくれぇぇぇ！！！！」
「コロス！！！！！！！」

クズが叫んだと同時に少年は剣を振り上げ・・・クズの首が胴体とお別れした

「・・・やるねぇ」

口笛を吹きながらそういうが反応が無い

そして少年はぎろりとこちらを数秒睨み、突然笑みを浮かべたか

と思うと

・・・人とは思えない速度で襲い掛かってきた

第3話（後書き）

やばいです・・・難しいです・・・

誤字脱字ありましたら報告してもらえるとありがたいです

第４話（前書き）

更新です＾＾；
見ていただけると幸いです

第４話

ＮＯＳＩＤＥ・・・

「アアアアアア！！！！」

狂ったように剣を振り回すイザック

その剣の速度、技術は『アムリタ』を飲む前のものとは格段の違っていた

そうでなければあの数の近衛兵たちを倒すことはできなかっただろう

しかしその剣技を・・・金髪の男はいとも簡単に弾き返していた・・・

「よっ・・・ふん！！」

「・・・！？」

袈裟懸けに斬り下ろしたイザックの剣を金髪の男はバックステップで避ける

そして、先程の近衛兵のものとは比べものにならないくらいの突きをイザックに

繰り出す・・・

その一撃はイザックの頬を掠め、イザックは横に飛び退き距離をとった

「・・・薬の効果か・・・傷がもう治ってきてるじゃねえか」

金髪の男は楽しそうにそう言う
見ると先程の頬を掠めた一撃は見る見るうちに回復していく
「吸血鬼・・・か・・・あのクソ野郎、気に食わなかったけど面白いもん残して言ったな・・・」
そういうと笑みを深めて舌なめずりをした
「俺の名前はキラ。キラ・エクスだ・・・覚えとけよ？」
金髪の男、キラはそう言い終わるとまた剣を構えた
「さぁ・・・楽しましてくれよ？・・・魔神剣！！」
そして、また戦闘が始まった
「・・・（ギィン）・・・陽炎」
「おぉっと！」
イザックはキラの魔神剣を剣で弾くとキラの真上に瞬間移動してから膝落としを繰　り出す
「守護方陣・・・」
「ぐはっ！」
それをバックステップで避けるが守護方陣によりダメージを受ける
「ちっ・・・雷神剣！」
「（ガキン）・・・！？」
だがそれでは終わらずキラは剣を突き出し落雷がイザックを襲った
突きは剣で弾けたものの落雷を受け、全身にダメージと痺れを受ける
「ちっ・・・薬飲んだとはいえまさかガキに一撃いれられるとは・

・・」
「・・・・・・・」
「まぁ・・・いいや・・・それならこっちも、ちょっとばかし本気を出そうかな」
「・・・・！？」

一瞬でキラの雰囲気が変わる

「俺・・・実は魔法剣士なんだよね・・・」

そう言い終わると突如、キラの足元に魔法陣が浮かびだした

「・・・長年修行を積んで・・・やっとできるようになったんだよな・・・
『詠唱待機』は誰にだってできる、しかしそれは、その間行動ができないという
弱点がある・・・そこで俺は・・・『遅延魔術』を習得したんだよ・・・」

殺気の密度が上がり、思わずイザックは後ずさりする・・・

「詠唱時間は普通の三倍強掛かるが・・・剣術もそれなりに使える俺にはたいしたデメリットのはならない・・・そして、お前がここに上がって来た時すでに詠唱は始まってんだよ！！！！」

キラはまた笑みを深くし

「耐えろよ・・・行くぜ・・・！・・・・・・・・インディグネイション！！！！！」

・

刹那、研究室に裁きの雷落とされ、周りは土煙に包まれた・・・・

崩れた研究所の瓦礫の上に立つ人影・・・

「・・・やり過ぎた・・・しかも逃げられた・・・」

はぁ～、と溜め息をつくキラ

「まあ・・・いいか。とりあえず戻るか・・・」

そして歩いていく

ふと、キラは足を止めた・・・

「次会うときは・・・もっと楽しましてくれよ・・・イザック」

そう呟くと今度こそ歩き出し、研究所から姿を消した・・・

イザックＳＩＤＥ

「はぁ・・はぁ・・はぁ」

イザックは走っていた足を止め、息を整える

「（なんだ・・・さっきの感覚・・・）」

あの・・・エリックとか言う男を・・・いきなり殺したいという衝動が襲った

そして、気が付くと殺してしまっていた・・・

そしてそれを・・・心から楽しいと思ってしまった・・・

それからは、体が言うことを聞かなかった・・・

イザックは思い出していた・・・
人を斬った、あの感覚を・・・

「（俺は・・・）」

やるせない気持ちに俺は拳を強く、強く握り締めた

そして、雨だ振ってきた音と共に城では研究所が破壊されたこと
による騒ぎが起こっていた・・・

第４話（後書き）

インディグネィションを使わせたのは・・・作者が好きだからです
＾＾

かっこよくないですか？インディグネイション＾＾

誤字脱字がありましたら報告お願いします
もちろん感想もしていただけると嬉しいです♪

第5話（前書き）

とりあえず更新^^；

第5話

ＮＯＳＩＤＥ・・・

「なんだ・・・これは・・・」

騎士を十人ほど引き連れた恐らく騎士団隊長と思われる男が呆然としながら呟いた無理も無いだろう・・・

いきなり轟音が鳴り響いたと思えば、城の敷地内にあった研究所が瓦礫の山になっているのだから・・・

「だ、団長・・・」

「なんだ・・・っ！？」

一人の騎士に呼ばれそちらを向くと兵士の目線の先には・・・皇帝の生首が

転がっていた・・・

「へ、陛下・・・一体、何が・・・」

転がる首を見ながら呆けていると

「隊長！！この近衛兵まだ息があります！！！」

そんな声が聞こえた・・・

団長はすぐさま声を上げた騎士の元に走った

「おい！近衛兵！！何があった！！？」

今にも消えてしまいそうな呼吸をしながらうっすらと目を開けた一人の近衛兵

「・・・極秘・・・じ・・・験・・・しっぱ・・・い・・・被験者・・・逃走・・・・・・・・・」

そこまで言い終えると近衛兵は力尽きた

しかしその情報で団長は全てを悟った・・・

「（実験が失敗しただと！？・・・しかも、被験者は逃走？・・・この惨状を見る限り能力を得て逃走した・・・となると・・・）・・・・・・まずいな・・・」

騎士団長も実験のことは聞いていたようだ

そして団長は最悪の結果を想像していた

「・・・・・・おい」

「はっ！」

「今日、ここに連れて来られた被験者の名前は？」

「はっ！、イザック・フーバー、１７歳です。私が連れてきたので間違いありません」

「そうか・・・恐らくそのイザックとやらがこの事件を引き起こしたらしい

騎士団全班を召集！その男の身柄を拘束する！至急だ！！急げ！！！」

「はっ！！！！！」

兵士は敬礼を済ますと駆け足でその場を去った

「（もし・・・もし吸血鬼化に成功していたら・・・・・・・報復にやってくる可能性がある・・・これだけの戦闘を行った今なら拘束できるかもしれない・・・その後は・・・城で幽閉させるか・・・）」

団長は頭を抱えていた

そして、先程から降っている雨が一段とまた強くなった・・・

イザックＳＩＤＥ・・・

雨が降っていた・・・

しかしそれでも俺はその場所から動けずにいた・・・

人を殺したという事実・・・殺人をしたというのにそのときには楽しさ・・・

快楽までも感じてしまっていた事実・・・そして・・・返り血を浴びて・・・

血を口に含んだときの・・・とてつもない力が溢れてきて・・・

制御できなかった事実

そしていつの間にか溜まっていた水溜りに目を向けると・・・イザックは驚愕した・・・

漆黒の闇のように黒かった髪は正反対の雪のように白く染まり、美しい青色をした両目だったのが、左目だけ炎のような真っ赤な赤に染まっていた

そして・・・口をあけると・・・鋭利にとがった・・・犬歯があった・・・

「ああ・・・そうか・・・俺・・・・・」

もう・・・・・・・・化け物になっちまったんだ・・・

第5話（後書き）

イザック吸血鬼化・・・

さて・・・この後どうしようか・・・（汗）

まあがんばって更新します^^

誤字脱字の報告、感想、アドバイスしてくれたら嬉しいです^^

第6話（前書き）

とりあえず投稿^^；

第6話

イザックＳＩＤＥ・・・

途方に暮れていた俺はただ歩き続けた・・・

気が付くと・・・俺が育った孤児院の前だった・・・

「・・・はは・・・いまさら何しに来てんだか・・・」

自嘲したように笑う

「・・・・・・」

そして、孤児院に背を向け歩き出そうとしたそのとき

「イザック！！！」

・・・そこにはいつもの服ではなく戦闘用の軽鎧に剣を携えた孤児院の先生の姿があった・・・

騎士団長ＳＩＤＥ・・・

「・・・まだ見つからないのか！！」

「す、すいません・・・まだ捕捉できていません」

イライラしながら部下の報告を聞く

このままでは取り逃がしてしまう・・・

一刻も早く被験者のイザックを捕らえなければ・・・

「（あの数の近衛兵を一人で倒した・・・完全に回復してから攻められてはひとたまり無い・・・）」

未知の力を持つイザックに恐怖を覚える団長

だからこそ、今捕まえておきたかった

そこに・・・

「団長！！被験者イザック・フーバーを捕捉しました！！！」

「どこだ！！」

「被験者の住んでいた孤児院前の路地です、三個小隊が今向かい、到着しだい迎撃するようです！」

「よし！全員向かうよう通達！我々も出るぞ！！いいか！？必ず捕まえろ！！」

「「「「「はっ！！！！」」」」」

団長の言葉に敬礼を返し、どたどたと音を立てて部屋から出て行った・・・

イザックＳＩＤＥ・・・

「あ・・・」

「イザック・・・」

頭が真っ白になった

「・・・なんで・・・」

「？」

「なんで・・・俺って・・・」

俺は今の容姿を見て一瞬でイザックだとわかった先生に驚いていた・・・

それを聞いて先生は

「あんたの髪の色や眼の色が変わっててもでも・・・何年も一緒にいればさすがにわかるよ・・・」

そういい先生は微笑を浮かべた

「それよりあんた指名手配されてるよ？・・・何があったんだい？」

「・・・・・・・・・・・・・・先生・・・俺・・・」

そして俺は、ついさっきの出来事をすべて先生に話した

人体実験を受けさせられ、化け物になったこと・・・そしてその力でたくさんの人を殺したこと・・・血をなめると・・・おいしいと感じる・・・化け物になったこと・・・

「・・・俺・・・怖いんだ・・・自分が」

「イザック」

名前を呼ばれ、体が震えた

「大丈夫だ」

そして力強く一言、そう言い放った

「・・・なんで・・・そんなことわかるんですか？」

「あたしは・・・あんたのこと信じてるからさ」

「信じてる」・・・先生はそう言った・・・

まただ・・・この人は・・・根拠も無いのにそんなことを言って・・・

・・・それにどれだけ救われ、どれだけ嬉しかったことか

先生は俺のさっきの話を聞いても・・・変わらずに接してくれた

「先生・・・」

自然と涙が流れた・・・

さっきのような悲しみの涙ではない・・・

「・・・泣くんじゃないよ、全く・・・」

先生は呆れたように言いながらもどこか嬉しそうに微笑んでいた

そのとき・・・

「イザック・フーバーだな？」

くぐもった声が聞こえた

そしてそこには・・・三十人は超える人数の騎士が武器を構え立っていた・・・

第6話（後書き）

・・・先生については説明する回を作ったほうがいいかな？
感想、アドバイスを頂けたらたら幸いです

第7話（前書き）

はい・・・孤児院の先生が・・・・

続きは本文でどうぞ！！

第7話

ＮＯＳＩＤＥ・・・

「・・・」

「おとなしくついて来い、さもなくば・・・」

一人の兵士がこちらに歩み寄る

「・・・わか「待ちな」・・・！？」

おとなしく捕まろうとしたイザックだったが・・・先生が言葉を遮り一歩前に出た

「なんだ？」

「・・・この子を孤児院を脅してまで無理やり連れて行って、人体実験を行いこの子を苦しめたあんたたちに・・・あたしが返すと思うのかい？」

先生の顔には・・・明らかな怒気が含まれていた

「・・・孤児院がどうなってもいいのか？」

そして、騎士は一番効果的だと思われる孤児院の名前を出した・・・

しかし帰ってきたのはかすかな笑い・・・

「はっ・・・もう他の子達は違う場所に移したよ・・・この子引

き渡してからあたしは助けに行くつもりだったからね・・・大事な大事な・・・息子をね・・」

先生は優しくそういった

「先生・・・」

「逃げな、イザック」

一言、先生はそう言った

「でも先生！この数は・・・」

「大丈夫だよ・・・あんたに剣を教えてたのは誰だと思ってんだい？」

先生は振り返りイザックにそう笑いかけた

「・・・いきなり孤児院を人質に取られたから対処できなくて・・・悪かったね・・・辛い思いをさせて・・・」

「先生・・・」

「港町の近くの森の中にあたしの友人、エルフのルナ、っていうあたしの古い友人が居るそいつのところにまずは行きな・・・いいね？」

小声で先生はイザックに言う

何かを言おうとするが、うまく言葉にできず押し黙ってしまうイザック

「もう行くんだね・・・囲まれる前に」

「・・・ありがとう・・・ございました」

頭を下げ、そう言った

「・・・早く行きな・・・」

・・・イザックは背を向けて走り出した
だから気づかなかった
先生が涙を流しているのを・・・

「追え！！」

イザックが走り出した姿を見た騎士が声を張り上げ、イザックの後を追うが・・・

「待ちな」

「邪魔するな！！」

進路を阻んだのは一人の女性
先程イザックを逃がした孤児院の先生である
そして、威勢よく斧を振りかぶりながら突進した騎士・・・
しかし、その斧は先生に届くことは無かった・・・

「がはっ・・・」

・・・いつの間に斬ったのだろうか
斧を持った騎士は脇腹から血を流し、前のめりに倒れる

後続の騎士はそれを見てたじろいだ

「かかってきな・・・あの子が遠くに行くまで・・・時間稼がせてもらうよ！！」

「なめるなぁ！！」
「虎牙破斬！！」

袈裟懸けに剣を振るった騎士だが先生は後退することなく、体勢を低くし流れるよ　うな動作で懐に入り込み、技を繰り出した
そして、騎士は反応することも叶わず二回の斬撃を受け絶命した

「・・・」
「次・・・」

その気迫は孤児院の先生をやっているものとは思えないほどのもので
騎士を睨みつけるその目は、視線だけで人を殺せるんじゃないか

と思うほどに鋭くなっていた

「怯むなぁ！！連携して攻撃をしろ！！術師、詠唱準備！！」

そして、騎士団と一人の女性の戦いは苛烈を極めるものとなった

騎士団長ＳＩＤＥ・・・

「・・・なんだこの惨状は・・・」

イザック・フーバーが捕捉された場所に着いた団長

そこには、多くの騎士の屍と・・・血塗れで拘束されている孤児院の先生の姿があ　った

「・・・この女が・・・イザック・フーバーを逃がし、なおかつ騎士団に大きな損害を与えました・・・」

疲れきった声で報告したのは先程指揮を取っていた小隊長である

「被害は？」

「・・・死者２３名・・・重傷者３名です」

「・・・・・・」

団長は言葉を失った

先にこの場所に向かわせた人数は３２名

しかし、そのほとんどが彼女によって帰らぬ者となっていたのだ

「・・・処刑しろ、その女は危険すぎる」

「はい」

そして・・・騎士は彼女に歩み寄った

「（イザック・・・ごめんねぇ・・・まともな母親できなくてさ・・・）」

「（・・・かばってやれなくてごめんよ・・・あの糞研究者どもにお前を売った

あたしが言うのもなんだけど・・・）・・・幸せになっとくれよ」

その言葉を最後に・・・先生は舌を噛み切り・・・息を引き取った・・・

「・・・自ら命を絶つとは・・・本当に何者だ？この女は・・・」

口から血を流し、呼吸を止めてしまった女性を見ながら、

今やるべきことに集中することにした

「イザック・フーバーを探せ！決して一人で動くな！何かあったら逐一報告しろ！

いいな！？」

「「「「「ハッ！！！」」」」」

そして騎士達は団長の言葉に敬礼を返した後持ち場に戻った

第7話（後書き）

先生無双・・・になったかな？

感想、アドバイスしてくださると嬉しいです！

第8話（前書き）

短いですが投稿・・・

第8話

イザックＳＩＤＥ・・・

俺は走った

全力で

するとすぐに町の外に出ることができた

町の入り口で・・・俺は足を止めた

・・・幼くして捨てられていた俺を、一生懸命育ててくれた先生

・・・剣に興味を持った俺に嬉しそうに剣を教えてくれた先生

・・・最後まで・・・俺のことを考えてくれた先生

そんな先生に・・・感謝を込めて・・・

「・・・ありがとうございました・・・」

震える声を絞り出しながら深く、深く頭を下げた・・・

きっと先生に会うことは二度とないだろう

だからこそ・・・深く、深く感謝をした・・・

先生に助けられたこの身を大事にしていくことを心に誓って・・・

そして、先生に言われたとおり、港町の近くにある森に向けて走り出した

NOSIDE・・・

無事に町を脱出し、港町近くの森を着いたイザック

そこには、暗い雰囲気の森があった

「ここか・・・」

イザックは一歩足を踏み出し森の中に入っていった・・・

時々襲ってくる魔物を撃退しながら森の奥へと歩を進めるイザック

「・・・何処にいるんだろ？」

案外広いこの森を探し回るのは少々きついものがあった

そんなことを考えていると

「・・・誰だ？」

突然とても澄んだ女性の声が聞こえた

その声音は明らかに警戒を含んだものだった

「・・・俺はイザックといいます・・・孤児院の先生に言われて

エルフのルナさん

がここにいると聞いて来ました」

「孤児院の先生・・・？・・・・・まさか」

すっと木の影から姿を現したのは女性

長い銀髪をポニーテールにしていて、整った顔立ちだがエルフの特徴であるその
長い耳が印象的だった

「まさか・・・リンの孤児院の子か？」
「・・・はい」

イザックは女性の問いにはっきりと答えた

「・・・来な・・・事情を説明してもらうよ」

女性は先生の名前・・・リンという名を聞きいまだ警戒しているものの
話を聞いてくれるようである

イザックは黙って彼女に従った

第8話（後書き）

新キャラ登場です

テイルズにはハーフエルフの仲間はたくさん出てきますが・・・エルフの人っていたっけ？

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第9話（前書き）

投稿です
見てもらえると幸いです＾＾；

第9話

イザックＳＩＤＥ・・・

女性の後を追っていると小さな家が見えてきた

「・・・ここがあたしの家だ、入りな」

「・・・お邪魔します」

ドアを開け、入るように促す女性

俺は一言そう言い家の中に入った

「・・・座りな」

家に入ると中には者がほとんど置いてなく、テーブルと椅子そしてキッチンがある

だけであった

そして言われたとおり俺は椅子に腰を下ろした

「・・・まず・・・あんたが探してるって言うルナってのはあたしだ・・・

あんた・・・イザックと言ったね？・・・リンがここに人を寄越すなんて

よほどのことでもない限りない・・・それにその目・・・普通の人間のものじゃな　い・・・何があった？」

エルフの女性・・・ルナさんはこちらをじっと見たまま俺の返答を待っていた

「・・・俺は・・・先生の孤児院の子で・・・昨日・・・城の研究室に無理やり引　き取られて・・・人体実験を受けました・・・そしたら・・・」
「その体になってた・・・ってことか？」
「はい・・・それから急に・・・研究者たちへの殺意を・・・抑えられなくなって
・・・研究所にいる奴たちを皆殺しにした後・・・逃げました・・・」
「それで？」
「・・・偶然先生と会って・・・あなたに会いに行けといわれました」
「・・・・・・・・もしかしてさ・・・その研究者の名前はエリックだったかい　？」
「！？・・・はい」

ルナさんは俺の話を聞いた後少しの間考えたかと思うと、あの・・・
最悪の研究者の名前を口にしたことに、俺は驚愕した

「ちっ・・・最悪だな・・・」
「・・・何がですか？」

俺は気になっていた
彼女がエリックという名を知っていることに
そして確信した
彼女は何か知っていると・・・

「・・・”アムリタ”だろ？あんたが投薬されたの・・・」
「・・・・・」

「その顔を見るとやっぱりそうだね・・・」

はぁ～、と溜め息を吐きルナさんはこちらを見た

「あんたは・・・”吸血鬼化実験”の被験者になって・・・成功しちまったんだね・・・」

俺はルナさんの言葉を理解できなかった・・・

「エリックって奴はあたしがまだ研究者だった頃に知り合った奴でね・・・

研究のことになるととにかくやばい奴だった・・・それからあたしは研究者を

辞めてここで暮らしてたんだけどね・・・一年前、あいつがここを訪ねて来たんだ　よ・・・『エルフの飲み薬』を寄越せってね」

「・・・・・・」

「はじめは拒否したんだ・・・だけど・・・リンの孤児院を潰すって言われたら

・・・折れるしかなかったんだ・・・そしたらあたしの血までほしいとか言い出し　てさ理由を聞いたら・・・あいつはこう言ったよ・・・」

『永遠の命を持つ・・・吸血鬼になれる薬を作るんだよぉ・・・キヒヒヒヒヒ』

「・・・気味悪かったさ・・・そして、完成したのが”アムリタ”・・・

あたしはすぐに解放されて戻ってきた・・・つまりあんたは・・・”吸血鬼”

になった・・・ってことだ」
「・・・・・・・・・・・・そんなもの・・・あるわけ・・・」
「あるんだよ・・・」

あるわけ無いと、信じたかった
だがその小さな呟きもルナさんによって否定された

「・・・エリックはね、この世でたった一人・・・錬金術を受け継いだ奴だったん　だ・・・”アムリタ”は錬金術のみで作ることができる霊薬で・・・
不老不死の力を得ることができる・・・だから・・・」

そこでルナさんは言葉を切った
理由はわからないが・・・俺の頭にはもうルナさんの言葉は入ってこなかった

「・・・あんたは・・・血を舐めたかい？」

ビクッと俺は肩を震わせた・・・

「そうかい・・・血を舐めたら体が・・・軽くなっただろう？・・・身体能力が上がっていただろう？・・・全部、吸血鬼の衝動なんだよ・・・」

ルナさんは淡々とそう述べていった
おれは・・・最後の希望を持ってルナさんにこう問いかけた

「元には・・・人間には・・・戻れますか・・・？」

そう問いかけルナさんの顔を見た

数秒、深刻な顔をした後・・・首を振った・・・

横に・・・・・・

俺はそれを見た瞬間意識が遠のいていった・・・

ルナＳＩＤＥ・・・

「・・・酷だったね・・・やっぱり・・・」

いろいろあったのに加えていきなり化け物といわれ・・・これだけ考えさせられたら・・・

「・・・リンはきっと・・・」

旧友の彼女を思い出す
清楚なイメージだった第一印象とは裏腹に、やんちゃで活発で責任感が人一倍強かった彼女は・・・今

「（・・・エルフの耳って・・・こういう時・・・嫌だよね）」

彼、イザックが来てから町の情報を聞いていた
エルフは耳がいい
ルナは耳を強化し、町で出ている情報を探っていた
その情報のほとんどが彼の捜索結果だったが・・・
その中に・・・

『孤児院の先生が騎士団に反逆し、死亡』
こんな情報が聞こえてきた・・・

「（リンは・・・優しすぎるよねきっと）」

この子が追われているところを見ると・・・逃がすために時間を稼いだのだろう
そして・・・私のところに来させた
そしてリンは・・・責任感と愛情を胸に・・・死んで行ったのだろう・・・

「・・・安らかに眠りなよ・・・しばらくの間は・・・この子を任されてあげるよ　・・・」

親友の死に流れる涙を拭おうともせず、ただただ涙を流し続けた・

:
:

第9話（後書き）

暗い話でした・・・

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです^^

第１０話（前書き）

イザックの眼の話です・・・

批判とか来ないか心配です^^；

第１０話

イザックＳＩＤＥ・・・

暗い・・・暗い場所だった
目を凝らして周りを見るがやはり何も見えない・・・

突然・・・明かりがついた・・・
そこには・・・

「”アムリタ”ですよぉ・・・キヒヒヒヒヒ」
「っ！？」
そこには右手にあの時の薬、”アムリタ”を、そして左手に・・・
首を抱えている
エリックの胴体があった
その姿に思わず小さく悲鳴を上げる

「実験体になれ・・・愚民め！！」
「やめろ！」
そしてもう一人・・・こちらはガンド皇帝・・・同じく首を持っている・・・

「さぁ・・・」
「さぁ・・・」
「「さぁあああああ！！！」」
「やめろぉぉぉぉぉ！！！！！」

「っっっ！？」

「！？」（ビクッ！！！）

「・・・・・・あ？」

周りを見ると・・・見知らぬ部屋に一人の金髪の少女が泣きそうになりながら立っていた・・・

「（夢・・・か？・・・っ、それより・・・）・・・悪い・・・びっくりさせちまったな・・・」

「・・・大丈夫・・・です」

少女は涙目のままながらもそう返してくれた・・・

「・・・ルナさん・・・呼んできます」

そう行って少女は部屋を出て行った

数分後・・・

「起きたかい？」

「はい・・・すいません」

「謝ること無いさ」

先程と違い、柔らかくなった雰囲気でルナさんは笑いかける

「・・・気分は？」

「・・・正直、悪いです・・・」

「・・・だろうね・・・はい」

ルナさんはおもむろに俺に何かを差し出した

「・・・これは？」

「眼帯だよ・・・あんたその左目の影響で魔力を常に消費してるんだよ」

ルナさんは俺の左目・・・色が変色したほうの目を指差しながら

「あんたの目・・・かつて、吸血鬼が持っていたとされる眼・・・いわゆる”魔眼”ってやつだね・・・その眼には能力があるんだ」

「能力？」

「ああ・・・一つは暗示と幻覚、異性には先の二つと共に好意の錯覚をもたらす能力」

「二つ目は身体能力の増加、これは解放して無くても一緒だけど・・・
解放したときとは比べものにならないから」
「三つ目は・・・得意属性の見分け・・・今のあんたの目はその状態になってる
右目閉じてみな・・・」
言われたとおり右目を閉じると・・・
「・・・!?」
「あたしはどんな感じだい？」
「・・・ほとんどが青ですが・・・緑と・・・黄色が少し混ざって見えます・・・」
「そうだろうね・・・あたしの得意な属性は水、風と土は基本程度使える
分かるかい？」
「つまり・・・色で属性が分かれていると？」
「そういうこと・・・赤なら火、青なら水、緑なら風、黄色なら土、紫なら闇
白なら光、桃色なら回復術、灰色なら補助術・・・そしてその色の濃さによってどれだけ
強い術を使えるか・・・こういった見分け方ができるのさ」
「・・・よく知ってますね」
「・・・エリックが奪って行った文献の情報だからね・・・」
ルナさんは少し顔を曇らせながらそう答える
「・・・恐らく、その三つの能力があんたの”魔眼”についてる・・・

制御方法はわからないから・・・これから練習するしかないね」
「・・・わかりました、ありがとうございます」
そう言って俺は立ち上がろうとする・・・が
ルナさんに手で制された
「・・・まだ何か？」
「どこ行くんだい？」
顔を真剣なものにしてこちらを見るルナさん
「もう行きます・・・お世話に「ここにいな」・・・・」
別れを告げようとした瞬間言葉をかぶせられ出て行くことを許されなかった
「お話も聞けましたし」
「・・・まだ眼の制御できないじゃないかい」
「・・・これから練習しますよ・・・」
「あんた一人でかい？」
「ええ」
そう答えた瞬間胸倉をつかまれた
「・・・餓鬼が大人ぶってんじゃないよ・・・」
すさまじい威圧感に俺は思わず押し黙った
「・・・そんな顔して・・・そんな心で・・・一人でいようとするんじゃないよ」

「・・・・・・・」
「あんた・・・リンが困ってたの・・・知ってるかい？」
「？」

ルナさんは少し笑みを浮かべながらこう言った

「『私の息子は・・・どれだけ辛いことされても・・・絶対にあたしに言わない・・・
子供らしく甘えたっていいのにね』・・・ってね・・・何年か前に来たときにそう言ってたよ」
「・・・・・・」
「・・・あんたは・・・背負い込みすぎだよ・・・まだ弱いくせに」

ルナさんの威圧が消えて・・・まるで先生のように優しく俺に笑いかけてきた

「・・・ここにいな・・・せめて少しでも傷が癒えるまで・・・」
「・・・・・・」
「・・・やっぱり・・・見かけによらず涙もろいんだね」
「え・・・？」

いきなりルナさんがそう言いだしたので思わず呆けた声で返事を返す
そして頬を触ると・・・温かい雫が流れていた・・・

「・・・リンほど器用に親できるなんて思わないけどさ・・・
あんたはもう少し甘えることも必要だよ・・・ずっと気張ってたら・・・しんどいじゃないか」

優しく・・・頭に手を乗せながらルナさんはそう言う

「・・・さっきここにいた子の相手もしてあげてほしいしさ・・・
もう少し・・・ここにいなよ・・・」
「・・・はい」

止めたいのに・・・止まらない涙
無くなったと思っていた俺の居場所ができた気がして・・・
素直に嬉しかった・・・

第１０話（後書き）

どうでしたか？

感想、アドバイスしてくれると嬉しいです＾＾

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6388y/

テイルズオブザワールドレディアントマイソロジー～吸血鬼物語～

2011年11月23日20時48分発行